

# 東日本大震災における福島県の子どもたちの経験—第1報— ～原発事故により避難した子どもたちの語りから～

小清水和美<sup>1)</sup>・工藤宣子<sup>2)</sup>\*

<sup>1)</sup>藤枝市立瀬戸谷小学校

<sup>2)</sup>千葉大学・教育学部

## Experiences of Children in Fukushima Prefecture After the Great East Japan Earthquake -First Report- —From the Story of Children Who Evacuated Due to the Nuclear Accident—

KOSHIMIZU Tomomi<sup>1)</sup> and KUDO Noriko<sup>2)</sup>\*

<sup>1)</sup>Fujieda City Setoya Elementary School

<sup>2)</sup>Faculty of Education, Chiba University, Japan

避難した子どもたち並びに避難先の子どもたちの個別の経験を明らかにし、今後災害が発生した際の子どもたちへの必要な支援や介入についての示唆を得ることを目的として本研究を行った。本報では、避難した側の子どもたちの経験について報告した。震災発生当時福島第一原子力発電所のあった町で被災した、震災発生当時中学2年生、調査時20歳の3名を調査対象者として選定し、インタビュー調査を行った。インタビューデータを解釈学的現象学に基づき質的に分析した結果、個々の価値観及び人生観に基づき語られた固有の経験が明らかになった。

キーワード：東日本大震災 (The Great East Japan Earthquake), 原子力発電所事故 (Nuclear power plant accident), 避難 (Evacuation), いじめ (Bullying), 解釈学的現象学 (Interpretive Phenomenological)

### I. はじめに

2011年3月11日14時46分に発生した東日本大震災は東北地方において甚大な被害をもたらし、中でも福島県内では東京電力福島第一原子力発電所（以下原発）事故の影響などにより、避難指示が出された区域内外から多くの住民が避難を強いられた<sup>1,2)</sup>。復興庁のデータによると、福島県の避難者はピーク時には約16万5千人を数え、震災発生から1年後の2012年3月末には62,700名の県外避難者が報告されている<sup>3,4)</sup>。

当時、神奈川県や山梨県の中学校で発生したいじめなど、原発事故の影響で避難した子どもたちへの偏見や差別の問題が報道で連日取り上げられ<sup>5,6,7,8)</sup>、震災翌年度におけるいじめの認知件数は、前年度の約2.8倍に増加した<sup>9)</sup>。

先行研究では、在籍する学校が異なっていたとしても、帰還困難区域から避難してきた子どもが、避難先（福島県内）の公園で遊んでいると、「放射線がうつる」と周りの子どもたちから仲間外れにされる等、日常生活の中でのトラブルが明らかになっている<sup>10)</sup>。避難を受け入れた地域の子どもたちが、帰還困難区域から避難してきた子どもたちに対して放射能にかかわる悪口を言ったり、無視をしたりすることは、子どもたち自身の自然発生的な言動であるとは考えにくく、周囲の大人の言動を見聞きしていたことにより影響されたと推察される。しかし、子どもたちがどのような経験からその言動に至ったのか

については、明らかにされていない。また、相互の子どもたちの関係や感情については、デリケートな問題であるがゆえに看過されてきた。

近い将来、首都直下型地震や南海トラフ地震が発生する危険性が高まり、避難した子どもたちと、避難を受け入れた地域の子どもたちに同様のトラブルが繰り返される可能性が危惧される。そこで、避難した子どもたち並びに避難先の子どもたちの個別の経験を明らかにし、今後災害が発生した際の子どもたちへの必要な支援や介入についての示唆を得ることを目的として本研究を行った。本研究では、福島第一原子力発電所があった町で被災し、県内の他市に避難した中学生を“避難した子ども”、震災前から避難を受け入れた地域に居住していた中学生を“受け入れ側の子ども”として双方に震災発生から高校生活までの経験についてインタビュー調査を行った。本報では、避難した側の子どもたちの経験について報告する。

### II. 用語の定義

A町：福島県の浜通りに位置し、震災発生当時福島第一原子力発電所があった町

B市：福島県内でA町の行政避難を受け入れた地域避難した子ども：

東日本大震災における福島原発事故の帰還困難区域（A町）で被災し、県内の他市に避難した中学生受け入れ側の子ども：

震災前からB市に居住していた中学生

※“避難先の子ども”という表現を用いると、避難し

\*連絡先著者：工藤宣子 n.kudo@chiba-u.jp

た人たちに主眼を置いているという印象を与えかねないと判断し、B市の調査対象者が、自分たちを指す言葉として使用していた“受け入れ側”という表現を採用した。

### Ⅲ. 研究方法

#### 1. 調査方法

##### (1) 調査対象者の選定

調査対象者は、震災発生時福島第一原発のあったA町で被災し、福島県内のB市に避難した経験のある3名である（各調査対象者のプロフィール参照※年代は震災発生当時のもの）。調査対象者の選定条件として、①震災のことにについて質問をした際、判断力があり自由意思で（保護者の同意の必要がなく）研究に協力できる20歳以上の者、②震災後中学校生活を1年以上過ごした者、の2条件を満たす者とした。したがって、震災発生当時中学2年生、調査時20歳の者を選定した。ボランティア団体の知人から調査対象者の紹介を受け、その後縁故法により調査対象者を拡大した。

##### (2) 調査時期および調査場所

調査は、平成29年1月から3月に実施した。また、必要に応じて追加の調査を平成29年11月から12月に実施した。実施場所は調査対象者の負担とならないよう、それぞれの対象者の提案を受け、プライバシーの保護に留意して決定した。

##### (3) 調査方法及び調査内容

インタビュー調査は、①震災発生時の様子について、②避難場所での様子について、③B市に避難した時の様子について、④学校再開の様子について、⑤震災後の中学校生活の様子について、⑥高校選択時の様子について、⑦高校生活の様子について、の7項目を軸に、半構造化面接法にて行った。

#### 2. 倫理的配慮

調査対象者に対し、研究目的や方法、倫理的配慮などを記載した研究計画書及び研究協力依頼書を提示するとともに口頭で説明し、書面にて同意を得た。また、インタビュー調査にあたり、インタビュー内容のICレコーダーへの録音及び筆記の許可を得た。なお、研究計画は、千葉大学教育学部生命倫理審査委員会による承認を受けた。

#### 3. 分析方法の選定理由並びに分析方法

中澤は、生きられた経験を当事者の視点から記述することは、「その個人が生活している社会の状況、問題の開示にもつながる」と述べている<sup>11)</sup>。また、村上は「事例をたくさん集めて一般化したときには抜け落ちてしまうであろう、偶然の出来事の細部を探ることが現象学の特技<sup>12)</sup>」、植田は現象学について「『その人にとって物事がどのような意味を持って現れているか』という経験の意味を示す」ことができると述べている<sup>12)</sup>。本研究では、個別の経験がデリケートな問題を含み、先行研究が少ないということを考慮し、解釈学的現象学に着想を得て開

発した独自の分析方法にて分析を行った。

解釈学的現象学研究とは、日常生活においては覆い隠されて取り残されている「生」の根源的な問題を、色濃く体験している人の経験の意味を解き明かすことについて、その原理の理解に迫り、支援に役立てることを目指す作業である<sup>13)</sup>。ここでいう体験とは、たまたまその人だけに起こり、世間の人々とは何の関係もない偶発的な出来事ではなく、どんな人にも起こりうる人間の普遍的なことがら、濃縮された形でその人に体験されていること意味するとされている<sup>14)</sup>。

本研究では、以下の4つの手順で分析を行った。(表1)

表1 分析手順

<p>手順1：録音した発話を、感動詞や言いよどみ等も含め、文字データとして再現し、逐語録を作成する。その後、逐語録をもとに意味のあるまとまりごとに区切り、表を作成する。</p> <p>手順2：逐語録を時系列に並べ直し、「震災発生から高校卒業まで」の時期に関する逐語を抽出する。</p> <p>手順3：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① 客観的に状況を把握するため、背景となる状況を整理する。「背景となる状況」とは、【身体的】、【社会的】、【心理的】状況の総体である。それぞれ、【a1. 身体的（医学的）状況：どのような（身体的状況などの基本的属性の）人が】、【a2. 社会的（福祉的）状況：どのような環境（家族や職場などの社会学的状況）のもとで】、【a3. 心理的（精神的）状況：どのような心理状況下にあるか】とする。</li> <li>② インタビューの発話の中で語り手の「背景となる状況」が語られていた場合には、逐語録から抽出し、①と同様にまとめる。加えて、インタビュー以外で知り得た情報や、インタビュー時の本人の様子も記述し、客観的に情報を把握するための補填とする。</li> </ul> <p>手順4：逐語録化された語りを、手順3による客観的な状況を参考にし、本人の立場に移し替えて解釈する。この過程は、解釈学的現象学における「還元」に相当する。その際、注目した言葉と、解釈の根拠を表に明示し、論証する。</p>
--

分析過程の例は表2のとおりである。

### Ⅳ. 結果及び考察

本報告では中学校及び高校生活についての経験が語られた箇所を抜粋し示した。実際の発話を枠内「斜字」で示し、続けて解釈学的現象学に着想を得て開発した分析にて解釈した結果（以下【還元の結果】）を記述した。特にその時期の心理的状态が示されている箇所をゴシック体として示した。なお、インタビュー時間は41～70分（平均56.7分）であった。

#### 1. 【調査対象者 a】の経験 〈プロフィール〉

表2【調査対象者a】の分析過程の例

調査対象者の発話	背景状況 a1=身体的(医学的)状況 a2=社会的(福祉的)状況 a3=心理的(精神的)状況	注目した言葉	解釈の根拠	解釈 【還元の結果】
まあ後はその完全に私の都合ではあるんですけど。	a1=中学3年生で受験校を決定する時期であった a2=A町の人々が行政避難している環境で、現地の人々とも人間関係が徐々に構築できてきた状況	その完全に私の都合ではある	G市なら特にどこでもいってみたいと感じた ↓ 自分が一番行ききたかった学校に、行くことができないと諦めたため、そのほかの高校は自分にとっては、どこも同じように感じられた。B市に心残りのある状態で、家族の条件を優先し本心を抑制した	(同じ故郷の友人の大半が進学する高校に進学しなかったが、家族の条件を優先し、G市に行くことを決断した。)
まあG市なら特にどこでもいってみたいと感じたので、まあ私は、そのなんだろう、普通科っていうか、なんかもう変わったことをしたいみたいな欲がそんな時強くて、どうしてもその、総合学科とか理数科みたいなちょっと変わったものをやりたいっていうのがあったので、まあG総合高校っていうところに最終的には決めて、	a2=総合高校(普通科<英語・数学・国語・理科・社会・体育・芸術などを中心に学ぶ>と総合学科<商業・農業・ビジネス・福祉などの専門科目などを学ぶ>)を検討 a3=春休み期間に仮設住宅での催しものに参加し、G市の人々のあたたかさを感じた a3=本当はA町出身の友人の多くが進学する避難先の高校に進学しなかった a3=ちょっと変わったものをやりたい	なんかもう 欲がそんな時強くて どうしてもその ちょっと変わったもの 最終的には	なんかもう変わったことをしたいみたいな欲がそんな時強くて、どうしてもその、総合学科とか理数科みたいなちょっと変わったもの ↓ A町の高校に進学することができないなら、普通はできないことをしたい	本心を抑制したため、A町の高校に進学することができないのであれば、普通ならできないことをしたいと思い、普通科ではなく総合学科のある高校を選択した。

- ① 性別：女性
- ② 同居家族の構成：父・母・本人・祖父・祖母・曾祖母
- ③ 語られたストーリーの背景：

震災発生当時、自宅で母・祖母とおり、夕方には自宅で家族と合流した。翌日誘導され避難したC市(福島県内)では、文化センターに泊まった。数日後連絡があったD県(中部地方)の叔母の社宅へ避難し、避難場所として開放されていたD県内のコミュニティーセンターへ移動した。その後関東のE県の叔父の家へ避難した。

関東にいるときに、A中学校がA町の行政避難先であるB市で再開する話を聞き、B市へ移動することにした。避難所はF市(福島県内、B市に隣接)の旅館へ配属され、バスで通学した。その後、B市内の避難所へと移動した。高校は家族の条件を優先し、県内のGに移動することとなり、G市内の高校を選択した。

(1) 中学校再開決定時期についての語り

「アパート住めるとこないかなっていうのも探してたんですけど、で、まあ転校しようかなって思ってたんですけど、やっぱりそのときにそのいじめの問題とかが結構起きてた時期でもあったので、あとほぼ同時期に、福島県のB市に、A中学校の分校ができますよっていう話を聞いて、じゃあそっちに行こうかなって

うことで、その後はえっと、B市の、その福島に戻ったっていう形ですかね。」「最初はまあそこまで不安はなかったんですけど、やっぱりなんだろう、整った環境で、まあ新しくスタートしようかなって結構考えてたんですけど。やっぱりそのニュースとかで毎日のように取り上げられているのを見ると、まあいくら自分はそうならないと思ってても、やっぱり慣れない環境だし、育ちも全然違う子たちにまあのまれてまあ嫌だっていう風にも思ったので。」「まあそのBで再開するよっていうのを聞いてからは、じゃあそっちに行こうっていう気持ちの方が強くなったので。」

【還元の結果】

関東の叔父のもとへ避難し新たな学年を整った環境でスタートしようと、自らを奮い立たせようとした。一方で、原発に関するいじめの報道を取り上げられているのを見ると、原発が身近でない環境で育ち、意識の違う人たちに囲まれて過ごすことに不安を感じていた。そのような状況下で、通っていた地元のA中学校が福島県のB市で再開するという話を聞き、残りの中学校生活を、同じ環境で成長してきた仲間と過ごしたいという気持ちが強くなり、福島県へ戻ることを決断した。

## (2) 中学校再開決定～再開後の中学校生活についての語り

「えっと何か、B市の隣にF市ってあるんですけど、ほとんどAの人はほとんどBに行っていて、でもなんか私はそのFの旅館にまあ飛ばされたっていうか、たまたまそこになってしまったので、まあFの旅館で、うーんと、夏頃までですかね、過ごしていて。えっと、学校はB市にあるんですけど、バスを出してくれてたんで、特にまあ問題とかはなかったんですけど。」「やっぱり安心感があつたっていうのもありますし。」「結構まあ、部活にしろなんにしろやり残してるのが結構あつたので。うーん、結構まあ、先生方もだいたいまあ来てくれてて、まあ、って言っても生徒数は半分ぐらいまで減っちゃったんですけど、それでもやっぱり嬉しいものは嬉しくて。」

## 【還元の結果】

A町の人はほとんどB市に避難していた一方で、自分は隣のF市の旅館に配属された。スクールバスが出ていたため通学は可能であったが、疎外感を抱き、不満であった。一方、馴染みのある環境に戻ってきたことで安心を感じていた。培ってきたA町での学校生活が想起され、中途半端に終わらせたくないと思った。再開後は、生徒数が半減した寂しさと、心を許せる友人に再会できた嬉しさが混在していたが、場所は違つたとしても、仲間と一緒に頑張ろうと思った。

「まあ基本的に、あーあとは、やっぱりあれです、支援物資がものすごく多く届いていて、そのシューズにしろ、まあ体育館とか外用のシューズにしろ、基本何でもこう支給をしてくれてて。あと食べ物とかも結構支給が多くて。それもまあ日本だけじゃなくて、結構外国からも多く寄せられていて、これでもかってぐらいその必要なものもらっていたっていうイメージがありますね。」

## 【還元の結果】

国内外から間断なく寄せられる支援物資に感謝を感じていた。一方で、需要を上回る量の食料や靴などで体育館が支援物資置き場となり、戸惑いを感じた。感謝はしつつも、本当に欲しい物は、避難時に家において来しまった愛着がある物などであった。

「結構F市の中でも市内の方に、市内っていうか街っていうか、結構いろいろ整っているところにあつたので、結構散歩とかはしてたんですけど、まあ特に何もその交流しようみたいなものはなかった。」

## 【還元の結果】

F市では、自発的に外出はしていたが、F市民と関わる機会はなく、また、永住する場所だとは考えていなかったため、自らも関わろうとはしなかった。

「夏以降は、まあその後の避難所っていうか、今度はあのアパートとか、あとは借家の一軒家とかに入ってくださいって言う指示が出るようになったので、本当に夏からは、今度はB市のほうになったんですけど。基本的に選ぶっていうよりは、町から指示を出されたところに入るっていうような形態だったような。ただその申請はもちろんしたんですけど。基本的に学生とか高齢の方とかいるところは、優先されて、だからたまたまいいところに入らせていただいたと思いますね。」  
「例えばその、Bの伝統行事があつて、結構その歴史の深い市なので、まああの武士の格好だったりとかつていうのを、あの若い人たちとかがその市内をぐるぐる回るっていう行事があつて、私はその時参加できなかったんですけど、もしよければそのA町の人も一緒に参加しませんかっていう声をいただいたりとか。」  
「あとはまあ私が避難したその一軒家の周りの人はすごいあつたかい人が多くて、結構地区としてもなじませていただいたっていうか、周りの人もすごい優しく、横の人もやっぱりその雪がある生活に慣れていなかったっていうのもあつて、まあ困つたことがあつたら言つてねとか、すごい優しい人ばかりで。まあその近くで、まあ髪を切つたりだとか、あとはその公民館とかでのまあ集まりとかにも参加したんですけど、まあやっぱり何かその隔てなくつていうか、まあ壁を作らずにあそこの人たちは接してくれたのがすごい嬉しかったですね。」

## 【還元の結果】

夏以降は、B市内の避難所に移動し、ようやく疎外感が解消された。学校を通してB市の伝統行事に誘われたが、大勢の市民とともにその地の伝統に触れる行事に参加するには、自分をよそ者と認識していたため、ためらい、参加することはできなかった。

一方、積雪の多い慣れない生活の中で、「困つたことがあつたら言つてね」などの近所の人たちの親切であつたかな言葉がけに、警戒心が解け始めていった。その後、近くの美容院を利用し始め、少しずつ人間関係が広がっていった。勇気を出して、公民館での集会に参加し、分け隔てなく接してくれる姿に喜びを感じ、信頼してもいい人たちなのかもしれないと思い始めていた。

## (3) 高校選択についての語り

「まあG市なら特にどこでもいいってみたいなき感じだったので、まあ私は、そのなんだろう、普通科っていうか、なんかもう変わったことをしたいみたいな欲がそんな時強くて、どうしてもその、総合学科とか理数科みたいなちょっと変わったものをやりたいっていうのがあつたので、まあG総合高校っていうところに最終的には決めて。」

## 【還元の結果】

同じ故郷の友人の大半が進学する高校に進学したが、家族の条件を優先し、G市に行くことを決断した。

本心を抑制したため、A町の高校に進学することができないのであれば、普通ならできないことをしたいと思い、総合学科のある高校を選択した。

#### (4) 高校入学後についての語り

「私たちも仮設住宅にえっと入っていて。その横1列になって、まあ間隔が狭いから、家の前を通られるとちょっと嫌だなあっていうのとか、まあ後はやっぱり子どもとかちっちゃい子がいて、まあ遊び場所が本当に無いからただただ可哀想なんですけど、やっぱりその、勉強とかをしたいときに、どうしても声とか気になってしまったり。まあしょうがないかなって思う反面、ちょっと、どうしようもないもんだなあっていうふうには思っていました。」

「土日とかになると、結構いろんな所の人が、一緒になんか作ってみませんかとか、後はなんかお祭りみたいな、簡単なもの開いてくれたりとかってことしてくれたりして、そういうのは私結構好きなので、積極的にまあ参加させていただいたりとか。そういう人が支えようとしてくれるんだなっていうのが、すごいわかってきましたね。」

「そうですね、やっぱりその、なんだろうなあ、まあ不便な面もあるっちゃあるんですけど、やっぱりそのプライバシーは今までよりはちゃんと確保されているっていうのは、まあ環境的には住みやすいっていうのはすごい嬉しい、かったですね。」

#### 【還元の結果】

G市では、仮設住宅に入居した。建物同士の間隔が狭いことにより、家の付近を通る人の気配を感じることや、勉強時に幼い子どもの声で気が散ることなど、不快に感じていたが、仕方がないと自分に言い聞かせていた。自分の生活基盤である仮設住宅での催し物には、安心して積極的に参加することができた。現地やボランティアの人々が、自分たちのために仮設まで出向いて催し物を行うなど尽くしてくれる姿に心を打たれた。一方、居住場所を提供してもらっている立場のため、警戒を言っはいけないという遠慮の気持ちがあった。

「やっぱりなんかどこかでこう、Aの話したらこう引かれるんじゃないかなみたいな不安は、やっぱりその時に大人になりつつっていうか、色々理解できる年になってきたっていうこともあって、ちょっと抵抗っていうか、どこまで言っはいいのかわかんないっていうのが、自分の中では結構あったんですね。」「まあ後はそのやっぱりG市まで行くと、まああとは数年経ってるってこともあって、結構その、なんだろうなあ、もともとG市に住んでる方と、避難してきた人の、まあいざござっていうのを結構聞いてたりして。私が直接いじめを受けたっていうのは全くなかったんですけど、やっぱり人に聞く話だと、あの、そのゴミの出し方1つ違うだけとか、あとはそのやっぱり来た人は態度が悪いとか。その街では当たり前だった事をやると、

まあその目をつけられるっていうのとか、まああとは、あーその1人がやっちゃっただけで、やっぱり避難民全体的に態度悪いじゃんみたいな感じだったりとか、まああとは、おばあちゃんとかだと、まあ費用が免除されたりしたんですね、なんか治療費っていうか病院に通ってる時のとか、まあそういうことに対しても、なんかいいよねみたいな感じの声を聞いたって言って、まあそういう面はちょっと悲しいなっとは思ってたんですけど。」

「直接的では無いにしろ、若干こう、例えば結構ツイッターとかをその時見てる時期だったので、例えば友達か、その避難民は結構金をもらってブランド物ばかり買ってるぞみたいなツイートをそのリツイートしたりとかすると、直接的ではないし、もしかしたら自分が過剰な反応をしちゃってるだけかもしれないけど、ちょっと嫌な気持ちになったっていうのは、ちょっとだけはありました。」

#### 【還元の結果】

高校入学時は、同じ境遇の仲間がいなことへの恐怖を強く感じていた。入学後は、特殊な学科の生徒たちの個性に刺激を受け、共に楽しく過ごしていた。一方で、ゴミ出しの仕方など、A町で当たり前だったことも態度が悪いと目を付けられたり、A町出身というだけでたちの悪い避難民として扱われたり、年配者の医療費免除に関して、皮肉を言われたりすることにより、G市の人々からの社会的疎外感を抱くようになった。また、G市の友人がSNSを使用し、避難民は結構金もらってブランド物ばかり買っているなどの情報を拡散している様子から、偏見を持たれていることに嫌悪感を抱いた。それらのG市の人々の誤解を解くために、真実を伝えたいというもどかしい気持ちはあったが、排斥されるのではないかと不安になり、心配して声をかけてくれた友人にも、話すことに抵抗を感じていた。

「結構私の中でのターニングポイントだったので、そこでやっぱりこうできることやってこうって思って、そこからはなんかこう、なんだろうなあ、自分をこう、避難民だからとか、Aの話あんまりしちゃういけないなって言うふうには思わなくなって、なんかむしろ、あのこういうことあったんだよみたいな、や、それよりうちの町のこっちのほうがすごいよみたいなかんじのを、むしろこう自慢げに話すぐらいにはなったんですね。イベント以降は、ぜんぜん、私も吹っ切れたっていう感じにはなりましたね。」

「結構積極的な人が多くて、本当に同じ高校生なのかと思えるような人が多かったんですね。それがやっぱり1番自分の中に響いたっていうのがあって、まあだったら自分の出来る事とかやるべき事とかちょっと考えれば山のようにあるじゃんっていうふうにして、なんでそれをちょっと恥ずかしいとか、まあ言われるからとかって不安ばかり汲み取って何もやってなかったんだらうなあってっていうのを、まあその時に思った。」

「言ったことに関して皆がすごい応援をしてくれて、頑張れとか、あとはなんか東北行きたいと思ってるんだけどなんかどういふことに今困ってるみたいなのを、後日メールで聞かれたりとかかっていうのもして。まあだからあの仲間がいたからこそ、まあ積極的になれたのかなっていうのもすごいあって。恥ずかしいことではなくて、ちゃんと伝えたいって思うようになりましたね。」

#### 【還元の結果】

社会の認識を変えたいと思っていたが、何から取り組むべきかわからず、思案に暮れていたところに、担任から「グローバル社会に向けて考える」という内容のイベントを紹介された。イベントでは、同世代である高校生が、自分の意思で積極的に社会参加している姿に刺激を受け、**A町出身ということにコンプレックスを抱き、消極的になっていたことが取るに足らないことのように感じられた。**悲観し諦めているだけではなく、まずは真実を伝えることが重要であると気付いた。最終日、周囲の反応に対する不安はあったが、勇気を出して故郷の現状や自分の想いを伝えた。周囲の温かな応援や、故郷へ関心を持ってくれた様子により、**郷土愛を持つことへの自信**が生まれた。**理解し応援してくれる人がいる安心感が原動力になり、公然とA町のことについて語る**ことができるようになった。

「私はすごい(A町に)戻りたい気持ちが、めちゃくちゃ強くって。えへへ。まあやっぱりその、住みやすくて大好きだったっていうのは今でも変わらないんですけど、まあ後はあのお母さんは結構戻らない派なんですね、うちのなかで。お父さんは戻る派で、で、おばあちゃんたちは、なんか多分戻りたいんだろうけど、年的にも難しいから、まあ諦めてるのかなって感じて。まあ私はすごい戻りたくて、だからこそ例えばAが、その入れるってなった時に胸をはって帰れるような人間になりたいっていうのが自分の中で1番あって。」

「おじいちゃん、おばあちゃん、ひいおばあちゃんがいるっていうのもあって、仮設だと大変なので家を建てて。まあ私としてはあんまり家を建てることに対しては、は、はん、賛成ではなかったですね。なんかやっぱりその家があるのに家を建てるってどういうことみたいな、っていうのがすごい自分の中であって、建ったあともその迷いは結構あったんですね。自分の大好きな街に立派な家があるのに、そこでずっと暮らしてきた大好きな家があるのに、なんで一軒家を建てなきゃいけないんだっていうのが、すごいあったんですね。だから、とはいえおばあちゃんたちのことをちょっと考えてみると、やっぱり建てなきゃいけないんだっていう風にも思ってた、その気持ちの整理はきちんとつけたつもりではあったんですけど。」

#### 【還元の結果】

初秋に祖父母たちの生活を考慮し、G市に一軒家を建

て、移住することになった。家族内でもA町へ戻ることにに関して意見が対立した。**故郷に帰還することを断念せず、戻ることのできた日には成長した自分でいられるよう、努力したい**と感じていた。一方、A町に思い入れのある家があるにもかかわらず、G市に新たな家を建てるということは、**A町が帰還できない地であることを認め、故郷を捨てることになるような気がして、移住を反対**していた。移住に関して気持ちを整理したつもりでいたが、実際住み始めてみても、**生家への愛惜が断ちきれず、A町に戻りたいという思いが払拭しきれなかった。**

#### (5) 【調査対象者 a】の経験からの考察

避難先では、現地の市民と関わる機会はなく、また、永住する場所だとは考えていなかったため、自らも関わりようとはしなかったこと、避難先の地域の伝統行事に誘われたが、自分をよそ者と認識していたため、ためらい、参加することはできなかった経験が語られた。未来に対する不確実感、チェルノブイリの事故の際も「フラッシュフォワード」と呼ばれ、友人関係や恋愛関係などを「とりあえずの、仮のつきあい」という浅く刹那的な対人関係とすることが指摘されている<sup>15)</sup>。一方で、近所の人たちからの声かけや、美容院の利用、公民館仮設住宅での催し物への参加などを通して、徐々に警戒心が薄れ、関係が構築されていった過程も明らかになった。生活基盤に近い小さなコミュニティでの直接の関わりが、新たな関係の構築に寄与したと考えられる。

避難先の場所に家を建てることに関して、【調査対象者 a】はA町が帰還できない地であることを認め、故郷を捨てることになるような気がして、移住を反対していた。その後、気持ちを整理したつもりでいたが、実際住み始めてみても、生家への愛惜が断ちきれず、A町に戻りたいという思いが払拭しきれなかった経験が語られた。

あいまいな喪失について、瀬藤らの論文<sup>16)</sup>の中で紹介されている。あいまいな喪失は、Pauline Bossにより、「はっきりしないまま残り、解決することも、決着を見ることも不可能な喪失体験」と定義され、「大切な人」をなくした場合だけでなく、大切な対象(土地や家屋など)や生きる方向を失った場合も含まれるとされている。東日本大地震における福島状況も、故郷の街に「戻りたい」と「戻れない」という両価的な二つの感情の間で常に揺れ動くことを繰り返すことで、次第にコントロール感を失い、無力感や絶望感が増していき、悲嘆が凍結しやすくと指摘されている。そして、区切りをつけたり、終結することが難しい悲嘆であり、続いていく苦しみや悲しみを十分にねぎらっていくことの重要性が言われている。本心を打ち明けられる場所をつくり、葛藤に寄り添っていくことが必要であると考えられる。

#### 2. 【調査対象者 b】の経験

〈プロフィール〉

- ① 性別：女性
- ② 同居家族の構成：父(役場職員)・母・姉(中学3年生)・本人・妹(小学生)
- ③ 語られたストーリーの背景：  
震災発生当時、自宅に母とおり、2人で父の勤務

する町の施設へ避難した。夜は母、祖母、妹、叔父、本人の6人で車中泊をした。翌日姉と合流できた。父の指示に従い、A町の本部があったC市（福島県内）の体育館へ自家用車で移動した。原発事故が起これ、父からH県（東北地方）の親戚の家に避難するよう言われ、父とは離れ離れになった。

B市でA中学校が再開することが決まり、母の勧めもあってB市への移動を決めた。家族全員が合流した。B市では避難所である旅館に避難していたが、祖母への負担を考慮し、アパートに住むこととなった。残りの中学校生活は再開したA中学校で過ごした。

高校は姉からの勧めもあり、姉の転校先であるB市内の高校への進学を決めた。

### (1) 中学校再開決定時期の語り

「私たち最初に中学が結構早かったんで、その、分校をB市に、A中学校の分校をBに作る、っていうのは結構早くに決まったんで、それだったら行こうかなみたいなことをいって。」

#### 【還元の結果】

県外の親戚の家に避難しているときに、B市でA中学校が再開することが決まり、母親が中学までは地元の友人と過ごした方が良くと勧めてくれた。B市の学校への転校ではなく、通っていたA中学校が再開するなら行こうと思った。

### (2) 中学校再開決定～再開後の中学校生活についての語り

「お母さんとかが、避難所っていうか、A町最初何か旅館を借りて、そこにAの人たちが住んでいたんですよ。でお母さんが、遊びに行ったらみたいなことを言ってくれて。」

「温泉とか、旅館、旅館ですね、旅館に行ったら、なんか学校を始まる準備をするから来れる人は来てほしいっていうことを（教師が）言っていて、その時に、お前らはこんなにいろんな人から支えられてもっているんだから、頑張って生活しなきゃだめだよという感じはたぶんあったと思います。うーん。」

「Bに行くと、Bに行ったら、いろんな友達にも会えたし、もう、ああ、よかったねみたいな、まだ携帯とかも持っていなかったから、よかった、また会えるね、また一緒に勉強できるねみたいなこととかも言ってる。Bにまあ行ってよかったですし、ひ、一安心、一安心というか、前とは周りの環境が違うんですけど人は同じ人と過ごす安心感とかもあったりとかして。不安は、不安はあんまりなかった、とりあえずなんか前と同じ友達と一緒にいられることとか、安心の方が多分大きかったですね。不安は、なんか、なかったかなあ。」

#### 【還元の結果】

B市では、避難所の集団生活による祖母への負担を考慮し、アパートに住むことになった。連絡手段がない状況で、友人の居場所がわからず、A町の人々の避難所と

なっている旅館には、自ら遊びに行こうとはしなかった。

学校再開に向けた準備の際に、教師から「たくさんの人に支えてもらっているのだから、善意に応え頑張って生活しなければいけない」と言われ、日常が急変し、精一杯の状況下で、なぜ自分たちがこれ以上頑張らなければいけないのかと思った。一方、安否がわからなかった友人たちと実際に再会し、無事を確認し合えたため安心した。震災以前とは環境は違うが、共に過ごしてきたA中学校の仲間と、残りの中学校生活を送ることのできる喜びを感じた。

「とりあえず人数がすごい減っちゃったから、仲良かった子とかもないし。」

「本当にすごい支援してくださる人が多くて、なんだろう、こんなにもものなんかあるのかな、そんなに、こんなあるんだっていうくらいに支援物資が届いて、勉強の道具とかも、筆記用具も、最初なかったですけど学校に届いていたし、靴もジャージも最初支援物資でもらって、ノートとかも全部もらって、っていうですかね。」

#### 【還元の結果】

学校再開後は生徒数が激減し、仲の良かった友人たちが転校してしまっただけで、寂しかった。一方で、さまざまな支援物資が届けられ、自分の想像以上の量に支援してくれる人々の存在を実感した。見ず知らずの自分のことを支えてくれている方々の思いに応えて頑張らなければいけないと発奮した。

「日常生活では、でもなんかみんな、家とかだったら、みんな環境が変わって、ストレスとかがあってよく、なんか家族で喧嘩はしましたね。もともと何か言い合っちゃう家族で、喧嘩をたまにはしてたんですけど、お父さんも疲れているし、なんかお父さんは、役場で避難所まわりをしてみんなの愚痴を聞いて回るみたいなことをして、すごいストレスがたまっちゃってたし、私たちもなんかなんだかんだ楽しかったんですけど、多分でもやっぱりストレスがあったんじゃないかなあ、喧嘩とかもしちゃったし。日常生活、でもまあ狭い家だったから。仮の住まいみたいな感じ、家がそんな感じで、自分の1人になる時間がなかなかないし、そんな感じですかね。」

「みんな、でもそのほか、従兄弟はみんな、東京とか福島とかの、学校に入って、なんだろう、転校した形になるので、まあなんかいじめとかもあつたらしいんですけど、でも私たちはその同じ、なんだろう、同じ人たち、場所は違うけど同じ人たちと、あの過ごせたから、いじめとかを感じなかったです、支援物資もいっぱいもらえたし、本当に恵まれているなあと思って、だからそんな不安とかもなかったのかも。」

#### 【還元の結果】

役場の職員であった父親は、避難所訪問をして人々の

愚痴を聞いて回っており、心労していたことは理解できたが、家族全員、環境が変わりストレスを抱えていたため、当たらないでほしいと思っていた。自身も、アパートは本当の我が家だとは感じられず、一人になれる空間も確保できないため、ストレスがたまっていた。一方、A町の近隣の町に住んでいた従兄弟からは、支援物資をもらえなかったり、県内外に転校し、いじめを受けたりしたという話を聞いた。それに比べて、自分たちは恵まれている立場だと言いかせ、わがままを言っていないと思っていた。

「いろんなものも増えてきたし、本当に引っ越しするときは何も、布団と食器とみたいな、ぐらしか持って行かなかったですし、日常生活に戻っていく感じで。」  
「でもなんか、日が経つにつれて、友達とかなんか、親の仕事の関係とかで、違うところに転校していったりとかで、え、だんだん人数が減ってちゃって、して、ちょっと寂しい。」

#### 【還元の結果】

支援物資のみに頼っていた避難生活から、徐々に物が揃い、自分たちの日常生活に戻っていく感じがしていた。物的には充足していった反面、親の仕事の関係などによる友人の転校が相次ぎ、人数が減少してしまっただため、寂しく、心が満たされない思いだった。

#### (3) 高校選択についての語り

「お姉ちゃんがなんか、そこに転校したんですよ。で、先生達もなんかすごく良くしてくれるし、なんか、良い人が多い、多いし、あと、進学校だからみたいな、そんなこと言って、入ろうと思いました。」  
「どこに行けば良いのかわかんなくて。」

#### 【還元の結果】

高校選択に関して、震災前は、地元にあった高校に進学することが当然であると思っていたが、原発事故により地元に戻る事ができなくなったため、突然先が見えなくなった不安を感じていた。B市内にある姉の転校先の学校が先生をはじめとし、良い人たちが多く進学校でもあると勧められ、姉のいる安心感もあり、進学を決意した。

#### (4) 高校入学後についての語り

「最初は本当に友達がいなくて、友達を作るのが、もう大変だったんですけど、その部活に同じ境遇の子がいて、それで仲良くなって。だからなんかそこでなんだろうなあ、そんな気を遣わなくても、そのなんかに聞かれることに、どこ出身なのって、なんか最初ってなにに中学校出身の〇〇ですみたいな感じの自己紹介があって、その時にA中学校出身のって言うことにちょっと最初は抵抗があったんですけど、でも、抵抗があって、大変だったんだねってみんな言ってくれて、

でも私は、まあ、なんか恵まれている、まだ恵まれているいろんな人に支えてもらってるからまだ恵まれている方だなんて思っていたんで、そうだなあでも全然大丈夫いまはもう普通の生活だから大丈夫だよ一気にしないで大丈夫みたいなことを言って、それで、原発の話とかをするとき、その同じ部活の同じ境遇の子がいたことで、気を遣わないでそういうことを話せるようになって、なんか帰れるようになってるの?とか、そういう話をできるのも、できる人がいたっていうことも心の支えになっていたのかなーと思ったりしますね。」

#### 【還元の結果】

関東地方の中学校に転校した従兄弟から聞いた、うつるから来るなと言われ、ベランダに閉め出されたり、暴力を振るわれたりなどのいじめの話や、ニュースでの、都会で起こっているいじめが報道から、A町出身であることを周囲に知られることに恐怖を感じていた。A中学校から入学した知り合いもいなかったため、友達を新たに作る勇気が出なかった。周囲から同情の言葉をかけられた際には、支えてもらっている立場であると感じていたため、心配をかけまいと気丈に振舞っていた。一方、入部した吹奏楽部では、中学生の時にA町と同じ郡内からB市へ転校してきた生徒と仲良くなった。同じ境遇の友人と、原発や故郷のことを気兼ねなく話せるようになり、心の支えとなった。

「これからI郡の子どもたち、だから今の私が高1だった時に小学生とかだった子どもたちが、あの、どういう風になってほしいか、その子達のためにどのような学校があればいいのかということを考えるやつに参加してみないかって言われて、お父さんが役場に勤めていたので、教育長さん経由でそういうのに参加してみないかって言われて、そういう情報、なんだろうなあ、なんていうんですかね、受け入れて、なんて言えばいいんですかね、いろんな偉い人とかも聞いてくれて、そういう人たちに自分がどう思っていたとか、学校は、I郡の子どもたちにとって、学校はどうあるべきか、どうなってあって欲しいのかな、っていうのを考える会議に何回か参加させてもらったりしたんで、結構前向きな、なんだろう、言いたい、なるべく言わないようにするんじゃないかって、どちらかと言えば言っ、いろんな人に忘れないでいてもらいたいみたいな感じに、考えが変わってきたのかなと思います。原発のこととかも。」

#### 【還元の結果】

高校1年生の時に、父の勧めでI郡の教育に関する会議に参加した。高校生だけでなく、行政や専門家の人たちと共に、話し合いを重ねた。今後I郡の未来を担っていく一員としての使命感と、自分たちの思いが実現する期待を抱くようになった。原発や故郷のことから目を背けたり隠したりするのではなく、事実を受け止め、世間

の人々に忘れずにいてもらうために自ら発信していきたいと思うようになった。

### (5) 【調査対象者b】の経験からの考察

【調査対象者b】は、避難先の同級生から同情の言葉をかけられた際には、支えてもらっている立場であると感じていたため、心配をかけまいと気丈に振舞ったり、自分たちは恵まれている立場だと言い聞かせ、わがままを言っただけかと思ったりしている様子が明らかになった。小林ら<sup>17)</sup>の調査では、災害を経験した中学生が、自分も被災して不便な生活を強いられているにもかかわらず、“他のもっと大変な被害を受けている人と比べたらましなのだからもっと頑張らなければ”と考え、今のつらい状況を乗り越えようとするのが指摘されている。

【調査対象者b】も、「自分のほうがましだ」と自身に言い聞かせることで、自分の感情を閉じ込め、周囲に気持ちを吐露しなかったことにつながったと考えられる。また、教師から「たくさんの人に支えてもらっているのだから、善意に応え頑張って生活しなければいけない」と言われたことに加え、たくさんの支援物資を目前にしたことも、本心を抑制した振舞いへ影響した可能性もあると考えられる。

自身に言い聞かせることで、つらい状況に耐え、平静を保とうとしているとも考えられるが、本心に蓋をして気丈に振舞う様子が見られる。支援を進めていく際には、まず自分が感じたつらさや不便さといった思いを我慢しなくてもいいというメッセージを伝えることの重要性が指摘されているが、子どもが自分の感情を表現できる環境を整えることが必要であると考えられる。

### 3. 【調査対象者c】の経験

〈プロフィール〉

- ① 性別：女性
- ② 同居家族の構成：父（原発関係の仕事）・母（専業主婦）・本人・弟（小学生）・妹（小学生）・弟（幼稚園児）
- ③ 語られたストーリーの背景：

震災発生当時、友人と図書館にいた。母と兄弟と合流できたが、原発で勤務する父の安否がわからなかった。避難用のバスを追い、C市の小学校に避難し、2日後に父親と再会した。

行政避難によりB市のホテルへ避難した。B市でA中学校が再開したが、仲の良い友人は全員転校していた。学校再開後は、保健室で過ごすようになり、アパートに引っ越した後は、登校頻度が減少し、友人の転校先のB市内の中学校に転校した。

高校はA町にJ高校がサテライトで開校されることとなり、選択した。入学してみると、ほぼA中学校の生徒で、仲の良い友達はいなかった。2年生のときに、友人の通うB市の通信制のK学園へ転校した。

#### (1) 中学校再開決定時期についての語り

「Bに避難して、したけどなんか、あまり知らない土地だし、ここで、やってかなきゃいけないのかなって

思ったけど。でもあんまり受け入れられなくて、仲いい友達もいなくなっちゃったから、だから、うまくやっていける気がしないかなーってというのは、うん。あんまり希望はなかった。」

「中学校は仮の校舎でやる、準備とかをしたいから、できればお手伝いして欲しいかなあって言って、って言って。お手伝いには、行った、行った。机出したりして。とりあえず頑張ってみようかなって、うん。学校もあるけど、今まで使ってた校舎じゃないし。嬉しかったけど、ちょっと不安とかは、あった。」

「なんか、自分が地元のA中学校、中学校にいたときは友達いっぱいいたけど、結構私と仲良かった子たちが違いなくなっちゃってたの自分かかってたから、多分孤立するし、ちょっとその中に入っていけないのかなーって思うのはあった。自分の仲いい人がいないの寂しいなーって言うのはあったかな。」

#### 【還元の結果】

学校の教師から、学校再開に向け、準備を手伝ってほしいという連絡が入った。久しぶりに先生の声を聞き、やるべきことが見つかったと感じ、行くことを決断した。馴染みのある校舎ではないことへの寂しさを感じていたが、準備に取り組む中で、学校が始まることを実感し、とりあえず頑張ってみようと思った。

学校が再開することは嬉しかった。一方で、仲の良い友人は皆転校してしまったことがわかり、クラスメートの中に解け込めずに孤立するだろうという不安やさみしさを感じていた。

#### (2) 中学校再開決定～再開後の中学校生活についての語り

「学校に最初のうちは行ってたんだけど、ちょっとしてから行けなくなった、なんか、そうだね、最初のうちは楽しかった。Bのホテルから、ちょっとしてからすぐアパートに引っ越したから、なんだろう、なんか、が、とりあえずなんか学校にいるのがすごい嫌で、なんか、から教室にいるのがすごい窮屈で、だから学校行ってもなんかほとんど、授業は出ても、なんか休み時間とかずっと保健室行ったりして、たぶん、なんだろう一番仲良かった子がいなかったっていうのがすごい一番大きかったのかもしれない。」

「3年生は、うーん、なんだろうなんか、中学校の時は何か、なんか結構全部、なんだろう、どうでもいいかなーみたいな、なんか元の生活にも戻れないし、でも今の生活しなきゃいけない、けど、なんか、戻れないならどうでもいいかなみたいな。多分、どうにかなるし、どうにかならないこと、うーん、から結局帰れないだろうし。そうだね、部活の吹奏楽で、テニスはやってたかな、吹奏楽は私は戻らなかった、なんか、音楽は好きだけど、避難してきてから、また自分が吹奏楽やろうって気分にはなんかならなかった。だから、何をやるにも、うーん別にみたいな、なんでもいいんじゃない、みたいなところはずっとあって。だから吹奏楽とかもなじめなくなっただし。なんか友達とも別に

あんま喋んなくて。」

#### 【還元の結果】

学校再開後、最初のうちは楽しかった。しかし、仲の良かった友人がいないことによる寂しさと、クラスメートからの疎外感を抱くようになり、授業以外は、息苦しさから逃げ場を求めて保健室に行くようになった。

ホテルからB市のアパートに引っ越した。自分の空間ができたことにより学校よりアパートが逃げ場となった。一方、避難所からアパートに移住したことにより、A町での楽しかった元の生活に戻れないことを実感した。自ら何かをしなくても生きるための生活は成り立つため、戻れないならどうでもいいかなと投げやりになり、無気力に陥った。所属していた吹奏楽部においても、立て直そうとする周囲と自分との温度差を感じ、音楽は好きだったが、再び活動しようという気分にはならなかった。何をすることも無気力になり、学校生活において友人とも喋らなくなっていくた。

「本当に自分が避難してきたっていうのをばれないように、過ごしてたかな。だからできれば自分がA中に通っているっていうのをまわりの人に知られたくなかったっていうのはあったかな。なんか塾に途中通い始めて、中学校3年生のいつからだろう、途中から通い始めて、どこの中学校ってみたいなきもちになったけど、A中学校って言いたくなかったから、同じ塾の友達とも喋らないでいたかな。弟のことがあって、避難してきてからって、なんか私たち自分たちがなんか危ないものを持っているからってわけじゃないから、それにしたくてここに来た訳じゃないから、そういうふうには言われる必要はないなって思った。自分もそういう経験してみたらどうなのって思ったかな。」

#### 【還元の結果】

弟がB市の公園で「放射線がうつるからあっちに行け」と悪口を言われたことや、いじめや差別の報道から、周囲に自分がA町民であることを知られることに恐怖を感じ、息を潜めて生活していた。

中学校3年生で通い始めた塾でも、A中学だと知られたくなかったため、塾に通っていたほかの学校の生徒と関わることを避けた。原発事故により避難してきたからといって危険なものを持っているわけでもなく、望んでこのような境遇に至ったのではないため、差別をされたり悪口を言われたりすることには、納得がいかなかった。

#### (3) 高校選択についての語り

「高校は、私は本当に、Aにいたときは、もうずっと地元にあったJ高校って所がすごい好きで、吹奏楽とかすごい上手で、それを見てからその学校に絶対入ってずっと思ってた。でも震災があって、帰れないから、その学校にはもういけないんだなって思って、そのまま高校受験ももう嫌で、高校行きたくないってなって。」  
「G市の中学校に友達がいたから、その子のところに

転校して、中学校に、うーん、で、そこの先生が、そろそろ受験の準備をしなければいけないって、そのサテライトで行きたかったJ高校があるから行けるって教えてもらって、それなら、高校受験しようって思って、もう受験の1か月前に勉強始めて、二期選抜で受験受けて、1か月間は本当に、ほんと、今まで何もしてない、どうでもいいやって思ってたから、受験はその時頑張ろうって思って、1か月間頑張って、高校に合格して、合格してすごい嬉しかったその時は、ちょっと希望が見えたなんか、もしかしたらもっと頑張れるかもしれないって。」

「高校生活は、入学式前に中学校の友達から連絡が入って、その高校は私が中学校の時にすごく仲が悪かった子がいっぱい入ってくるって話を聞いて、誰々も一緒なんだよって言って、結構Aの子がほとんど入ってくるって言われて。なんでだろうって思って。それがちょっとかなりショックだったっていうのもあった。」

#### 【還元の結果】

震災以前は、吹奏楽部の強豪であるA町にあったJ高校に憧れており、絶対に入学するという強い決意を抱いていた。しかし、原発事故によりA町に帰れないことが分かり、高校への進学を断念せざるを得ず、高校に行く気も失せた。

友人のいる学校へ転校し、教師からJ高校がサテライトで開校されていると紹介された。気を取り直して受験を決意し、1か月間全力で勉強に取り組んだ。

合格した時にはこの上ない喜びを感じ、震災後無気力に陥っていたが、震災前の気持ちに戻り、そこを原点として、また頑張ることができるかもしれないと希望を感じた。

入学前に、友人から中学生の時に仲が悪かった人たちを含め、A町出身の生徒の大半が、入学してくるという話を聞いた。なぜ何度もこのような目に遭わなければならないのかと愕然とした。

#### (4) 高校入学後についての語り

「で、私寮に入ってたから、でそこでも、いろんな先輩から、Jの1年生は、騒がしいとかうるさいとか生意気だっていうのもすごい私がいっぱい先輩から言われて聞いてて、すごいいろいろストレスで、すごい寮の生活の中でもストレスで、学校でもストレスだって。その時期食欲がなくて、具合悪くなるのがしょっちゅうあって、それで学校続けられる気がなくて、お母さんとかに相談して。今のまま行っても楽しくないし、自分が潰れるっていうのがあったから、で、もうやめようって思って、Bの、お母さんはBに帰ってきていいよって言ってくれたから、Bで私の友達が行ってた通信高校がK学園で。」

#### 【還元の結果】

入学後クラスの半数がA町出身の生徒であり、中学校生活の延長のような状況になったため、クラスにいるの

が苦痛になった。一方、寮では先輩から同学年の生徒の態度について文句を言われ、心労していた。一日中ストレスを感じる環境下、食欲が減退し、頻繁に体調不良が起こるようになった。次第に通学を継続する気力を喪失した。すがる思いで母親に連絡し、家族のもとに帰ってきていいよと受け入れてもらえたため、安心した。友人が通学するB市のK学園へ転校した。

「ここは、こどもAも何人かいたけど、その子たちは私も全然仲良くて、すごい楽しかった。」

「一緒にお手伝いに来ていた同い年の子がいて、その子がすごいいい子で。その時初めてBの友達で、すごい、あ、この子いいなって思った子で、B最初は本当にBにいたの嫌だったけど、その子と仲良くなってからは、Bに来てよかったなって思った。なんか、みんな、やっぱ、Aの人はBにいるからって。なんかあれ、うーん。息苦しかった。Bの人にどこに住んでんのって聞かれても、出身どこって言われても、Aってというのが嫌でなるべくそういう話にはしたくなかった。」

「高3は学校にしょっちゅう行って遊んでたりしたから、先生もすごいいい先生で、いろんな相談のつてくれたりもしたから、高校生活で1番楽しかったから、その高校生って楽しいなって思ったかな。でもBで友達できてからは別に、周りの目はそんなに気にすることなくなって、自分から何でもやってみようかなって思えるようにはなった。その子はうーん、私がこうしてみたいっていうと、いいんじゃないって言って一緒にやってくれて、いつも応援してくれたから。」

#### 【還元の結果】

転校先のK学園には、A町出身の生徒も数名いたが、中学生の時に不仲だった生徒ではなく、共に楽しく学校生活を送ることができた。高校3年生の春、入学式準備で手伝いに来ていたB市出身の同学年の生徒と気が合い、仲良くなった。高校3年生では、心を許せる友人や、信頼のおける教師の存在があり、高校生活はこんなに楽しかったのだと実感し、充実感を味わっていた。登校日以外にも自ら進んで登校するようになった。自身が何かに挑戦する時は、親友が常に応援し協力してくれたため、自信がつき、何でもやってみようという意欲がわくようになった。日常生活においても、常に味方でいてくれる親友の存在により、周囲の目に対する不安感が軽減し、気にならなくなった。A町的话题を避けながらの生活が息苦しく、B市にいたくなかったが、B市に来たからこそ、親友に出会うことができたため、来てよかったと思うようになった。

#### (5) 【調査対象者c】の経験からの考察

【調査対象者c】の語りからは、部活動で立て直そうとする周囲と自分との温度差から、活動への意欲が減退していったこと、そこから何をすることも無気力になり、学校生活において友人との会話をしなくなったこと、憧れていた地元の高校への入学の夢が絶たれ、高校への進学意欲を失ったこと、避難所からアパートに移住した

ことにより楽しかった元の生活に戻れないことを実感し、自ら何かをしなくても生きるための生活は成り立つため、投げやりになり無気力に陥ったことなどの経験が語られた。これは、先に挙げたあいまいな喪失による無気力の表れに相当すると考えられる。

あいまいな喪失への支援として、一つの結論にこだわらず、「AでもありBでもある」という弁証的な考えを持つことが有効であると言われている<sup>18)</sup>。「将来がどうなるかわからない不安」があると認めつつ、「新たな人間関係や生活を作る機会がある」という発想も提示し、両面的な思いを受け入れられるような支援も、手立ての一つとして考えられる。また、家族でなくても苦しい局面に一緒にいてほしいと感じたり、ほっと安心できたりする「心の家族」の存在が苦痛を和らげるうえで重要であると述べられている。【調査対象者c】が、高校で出会ったB市出身の友人の存在が、これに当たると考えられる。

一方、同じ体験をした人たちの集まりをサポートしていくことの有効性も示唆されているが、【調査対象者c】からはA町の環境に残ることで、限られた人間関係の中でのトラブルにより、二度の転校をした経験が語られた。災害発生以前の関係性にも目を向け、狭まれたコミュニティだからこそ起こり得る問題も念頭に置かなければならない。

## V. 総合考察

研究対象者3名の経験は、固有のものであり、個々の価値観及び人生観に基づき語られた。その中でも、いじめや差別への恐怖が共通して語られた。

【調査対象者a】のゴミ捨て方などの違いから、たちの悪い避難民（発話より）としての扱いを受けたこと、年配者の医療費免除に関して、皮肉を言われたことなどから、避難先の人々からの社会的疎外感を抱くようになった経験、また、避難先の友人が、直接的ではなくてもSNSで避難してきた人々を非難するような情報を拡散している様子から、偏見を持たれていることに嫌悪感を抱いた経験が語られた。しかし、それらの誤解を解くために、真実を伝えたいというもどかしい気持ちはあったが、排斥されるのではないかと不安になり、心配して声をかけてくれた友人にも、話すことに抵抗を感じていたことが明らかになった。また、【調査対象者b】は、関東地方の中学校に転校した従兄弟がいじめを受けた話や、ニュースで都会で起こっているいじめの報道を見聞きしたことから、A町出身であることを周囲に知られることに恐怖を感じ、高校では地元中学校から入学した知り合いもいなかったため、友達を新たに作る勇気が出なかったという経験が明らかになった。さらに、【調査対象者c】は弟が目の前で「放射線がうつるからあっちに行け」と悪口を言われたことや、いじめや差別の報道から、周囲に自分がA町民であることを知られることに恐怖を感じ、息を潜めて生活していたこと、通い始めた塾でも、A中学だと知られなくなかったため、ほかの生徒と関わることを避けたという経験が語られた。

辻内<sup>19)</sup>らのアンケートでは、避難してきていることを地域の人に話すことへの抵抗感について、宮城県や岩手

県と比較し、福島県の避難者はあると答えた割合が高く、原発災害の特徴であり、遠隔地かつ広域の非難を余儀なくされたこと、放射能や賠償金というスティグマによる被害であることが述べられている。本研究でも、いじめや差別への恐怖をかかえながら生活を送っていたこと、またそれが本心を隠すことや、新たな人間関係を築く上での障害につながっていたと示唆された。

先行研究では、いじめや差別をされる可能性に不安を感じている子どもや大人には、その不安を安心して表出できる場が必要であると述べられている<sup>20)</sup>。縁故がない土地での生活の孤立感や、社会的疎外感、排斥されることへの不安などから、避難者が口をつぐまざるを得ない状況に在ることを念頭に、情報の見極めの重要性を発信していくと同時に、本音を吐露できる場所をつくる必要があると考えられる。

## VI. 研究の限界と今後の課題

本研究では、懐古的な語りを研究データとしており、実際渦中にいたときの思いとの隔たりが生じていることは否定できない。また、研究対象者が少数であることから、今後その人数を増やし、さらなる理解を深めることが必要とされる。

## 謝 辞

本研究の実施にあたり、調査対象者としてご協力いただきました皆さまには、本研究へのご理解と多大なご協力をいただきました。本研究に際しましてご指導・ご協力を賜りました皆さまに心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

## 参考文献

- 1) 福島県災害対策本部：平成23年東北地方太平洋沖地震による被害状況即報（第1781報），令和3年10月5日  
Available at: <https://www.pref.fukushima.lg.jp/site/portal/shinsai-higaijokyo.html>  
Accessed October 23, 2021
- 2) 福島県大熊町：大熊町震災記録誌 福島第一原発、立地町から，平成29年3月
- 3) 前掲1)
- 4) 経済産業省 資源エネルギー省：あれから10年，2021年の福島の「今」，2021. 4. 2  
Available at: [https://www.enecho.meti.go.jp/about/special/johoteiky/fukushima2021\\_01.html](https://www.enecho.meti.go.jp/about/special/johoteiky/fukushima2021_01.html)  
Accessed October 23, 2021
- 5) 朝日新聞デジタル：原発避難先でいじめ 生徒手記，2016. 11. 16  
Available at: <https://www.asahi.com/articles/ASJCH5GJYJCHULOB02P.html>  
Accessed October 23, 2021
- 6) 毎日新聞：横浜・原発いじめ，2016. 11. 23  
Available at: <https://mainichi.jp/articles/20161124/k00/00m/040/070000c>  
Accessed October 23, 2021
- 7) 毎日新聞：体操着バケツで汚され…原発避難の小学生，いじめのその後，2021. 4. 19  
Available at: <https://mainichi.jp/articles/20210418/k00/00m/040/222000c>  
Accessed October 23, 2021
- 8) NHK：震災6年 埋もれていた子どもたちの声～“原発避難いじめ”の実態，2017. 3. 8  
Available at: <http://www.nhk.or.jp/gendai/articles/3947/index.html>  
Accessed October 23, 2021
- 9) 文部科学省：児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査  
Available at: [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/seitoshidou/1302902.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1302902.htm)  
Accessed October 23, 2021
- 10) 島田和美 工藤宣子：東日本大震災被災地における学生ボランティア活動が，被災地の子どもたちに与えた影響—一家のインタビューと学生ボランティアの記録から—，千葉大学教育学部研究紀要 第65巻，237-244，2017
- 11) 稲原美苗 川崎唯史 中澤瞳 宮原優：フェミニスト現象学入門，ナカニシヤ出版，2020
- 12) 村上靖彦：摘便とお花見 看護の語りの現象学，医学書院，2013
- 13) 佐久川肇，上田嘉好子，山本玲菜：質的研究のための現象学入門 対人支援の「意味」をわかりたい人へ第二版，医学書院2013
- 14) 前掲13)
- 15) 蟻塚亮二：原発事故がもたらした難民の状況と，そのメンタルヘルス，更生保護学研究第12巻，89-91，2018
- 16) 瀬藤乃里子 黒川雅代子 石井千賀子 中島聡美：東日本大震災における「あいまいな喪失」への支援—行方不明者家族への支援の手がかり—，トラウマティック・ストレス第13巻第1号，69-77，2015
- 17) 小林朋子 櫻田智子：災害を体験した中学生の心理的变化—中越大震災1ヶ月後の作文の質的分析より—，教育心理学研究60，430-442，2012
- 18) 前掲16)
- 19) 辻内琢也：原発避難いじめと構造的暴力，科学88，265-274，2018
- 20) 内山登紀夫：災害といじめ 東日本大震災後の福島をめぐるいじめとコロナ禍，精神医学63，187-197，2021